

和歌神

松尾芳樹

諸芸にはその芸道に関わる者を護る神がいる。大方その芸道の祖たるものを祭ることが多く、歌道においても存在する。

「古今和歌集仮名序」には、素戔鳴尊・下照姫したてるひめといった歌道の祖とするにふさわしい上古の神を示す他、「うたのひじり」として柿本人麿を挙げ、同じく山辺赤人を挙げている。この見解は古今集の後世への影響を考えれば和歌神成立の基盤となるものであったろう。

和歌神は現在に至るまでその神名必ずしも確定しないが、諸伝に挙げられるものを記せば、素戔鳴尊、下照姫、住吉神、玉津島神、衣通姫そと通りひめ、北野天神、柿本人麿、山辺赤人、紀貫之、藤原定家などとなる。これらは全てが神威を以て崇拜された神とは限らず、歌聖うたのひじりと呼ばれる人ながら聖別されたものも含む。これが広義の和歌神である。

『古今著聞集』には平安時代後期、瞻西上人せんさいの歌会の為に和歌曼荼羅を制作する説話(巻六・一二)があるが、その本尊は過去七仏であった。和歌神が人々の意識の内に影を映し始める時期は定かでないが、歌学の形成期にあたる十一・十二世紀頃のことと考えて良いだろう。十一世紀の兼房視夢による人麿像の説話(十訓抄)や元永元年(一一一八)の顕房邸での人麿影供(柿本影供記)の記録は、和歌曼荼羅の例も含めて和歌神成立の過渡的な状況を示すものとみてよいと思う。

藤原公任以後、歌道家に歌論書を著すことが増し、歌学を論ずることが盛んとなった。このことが和歌神の定着を促したのである。特に十二世紀前期に始る歌道伝授の存在は大きな意味を持っていた。

しかし、諸神がどのように選択され信仰を確立したのか、あまり確かなことは分っていない。鎌倉末室町初期に成立したと考えられる歌論書『悦目抄』には和歌神

六神名が挙げられる。ここには住吉と玉津島という「古今集序」に歌枕として現れるにすぎなかった土地の神名が現れている。そして人麿と赤人、下照姫と素戔鳴尊の名も見え、これら六神は二柱を一对とする三組として列記されている。

近世三神として表されることの多い和歌神も中世では神の基数としてむしろ本来的な二神をもって示されていた。『源平盛衰記』巻七や二条為世の『和歌庭訓』には当時和歌神として住吉玉津島二神が信ぜられていたことを窺わせる記述が見られる。中世では歌祖としての本義にかなう下照姫、素戔鳴尊を押さえ、和歌神たる理由の曖昧な住吉神と玉津島神が信仰を受けていたらしい。

両神を歌神として信仰することに関しては、伊勢貞丈(和歌三神考)や千家尊澄(歌神考)をはじめ、本居宣長の『玉勝間』に引かれる岩橋秀栄の説(今按名蹟考)など近世の学者がその誤を論じる通り不明の点が多いが、両神が歌神として崇拜を受けた歴史は疑うべくもない。

和歌神としての住吉神の信仰は『千載和歌集』の長元八年(一〇三五)大納言経輔の歌(巻二十)よりかなり早いことが分かる。その理由については『伊勢物語』百十七段の記事などから、現人神として人の前に姿を現し、歌により託宣を行う神として信ぜられたことが挙げられる。

よく言われるように、この地が万葉集以来の歌枕であることや、熊野や高野山詣の道筋であったことも一つの要素ではあったかと思うが、注目すべきは住吉社の神職を代々勤めた津守氏の存在であろう。この家に歌道に秀でるものが多かったことはよく知られており、特に平安後期の歌人津守国基は住吉を歌うこと多く、住吉玉津島に関わる説話の主人公として諸書に現われる。和歌神住吉神が意図的に作りだされたとは考えないが、津守氏の喧伝が重要な要素となったことは否定できない。

歌神としての玉津島神は衣通姫の垂迹とされる。「住吉の堂の壇のいしとりに紀の国にまかりたりしに、和歌の浦の玉つ島に神の社のおはす、尋ね聞けば衣通姫のこの所を面白がりてかみになりておはすなりと」(津守国基集)とあるのを見れば

平安時代後期には玉津島神と衣通姫の習合は定着していたのであろう。

玉津島神が和歌神とされるようになったのは、その鎮座地が歌枕でもある和歌浦であったためらしい。『続日本紀』にみえる神龜元年（七二四）の聖武天皇紀伊国行幸の記事より、玉津島神は本来和歌浦（旧名弱わか浜はま、この行幸により明光浦あかのうらと名を改める）の土地神であった明光浦霊と考えられるが、現在には他に稚日女尊わかひるめのみこと、息長足姫尊、衣通姫が祭られている。聖武天皇行幸の際同行した山辺赤人は、玉津島を詠じ（万葉集卷六）、以後この地は歌に関わりが深くなった。

この社に衣通姫が祭られることになった理由は不明である。『親房卿古今集序註』には、仁和三年（八八七）光孝天皇の御惱の時のこととして「赤袴着たる女房枕に立て云う。立かへり又も此世に跡たれん其名うれしきわかわかのうらなみと。御門御夢に見へければ。夢中に誰人そと問給ふ。衣通姫と答たまふ。」という視夢の説話があるものの、きわめて伝説的であり歴史への距離は遠い。

稚日女尊はその音が和歌に通じることから後に配祀されたと思われるが、その時期は鎌倉末期に遡る可能性がある（日前宮文書）。また平安期の歌論書『奥義抄』にも示されるように、住吉神社四柱の内第四殿の姫神については神功皇后の定説の他玉津島神とする説のあることが知られ、この玉津島神は衣通姫とされる。ために後世、神功皇后と玉津島神の混乱が生じる場合もあった。

京に和歌神が祭られたのは藤原俊成が文治二年（一一八六）勅命を受けて邸内に玉津島神を勧請するのが最初といわれる（同社伝）。中世、和歌所を隣接し京の歌学、和歌神信仰の中心地として、尊崇を受けること篤いこの新玉津島神社は、応仁の乱に荒廃するが、永禄十一年（一五八六）正親町天皇の命により現在の住吉町（醒ヶ井通高辻）に遷座された。その際、住吉神社と名が変えられてしまったことは、こうした住吉神と玉津島神の祭神の混乱を前提としなければ理解しにくいことである。

不思議なことは住吉神社へ遷座したはずの新玉津島神社がその後旧地に再興し、本来一つであるべき両社は並立するところとなった。『實隆公記』の中で（明応

四年（一四九五）四月十九日）宗祇は「抑玉津嶋者住吉明神化現也」と語っておりこ

こでも両神交錯の様を見せる。当時、和歌神として住吉玉津島を同一視することに抵抗がなかったのかもしれない。しかも『二十二社本縁』にもこうした説が採用されているから単に歌道家のみの伝承という訳でもないらしい。

このような複雑な経過によって、中世末期以後京には勅使を受ける和歌神二社が鎮座した。してみると平安末期から中世末期にかけて京の和歌神は玉津島神一つであったようである。これは多分に玉津島の地理的な不便さもあったのだろう。ここで再び衣通姫の問題に戻ってみよう。衣通姫については『古事記』と『日本書紀』で伝承が異なる。通常記は誤伝とされ、紀の伝承である允恭帝の妾とする説が流布している。姫は女流歌人としては皇后を除き最も古いものではあるが、歌は紀に二首を詠むばかりである。さらに、紀によれば姫は茅渟ちづめの宮にいたとされる。和泉国和泉郡にあったと思われるこの宮は、紀伊国海部郡に属す和歌浦とはかなり離れており、地理的關係を見出すことは難しい。この和泉にも津守氏の一族のあったことは『新撰姓氏録』和泉国神別の記事より知れるが、和歌神成立との関係は不明である。つまり「古今集仮名序」が小野小町を「衣通姫の流なり」としたことより他、歌神となすべき理由は見当たらないのである。

『津守国基集』には先にしめした詞書に続き、国基が玉津島神に献歌をし、その夜の夢に唐装束の神女十人が現れ歌を感謝し壇石の所在を教えたという説話を記している。これは藤原清輔の『袋艸紙』にも引かれ、和歌神玉津島神の成立に大きな影響を与えたものと思われる。

十羅刹女にも通じる視夢の像の拠る所がどこにあるのか分からないが、玉津島神の姿に桂袴のものと唐服のものがあるのも、羅刹女の図像を想起させる。また、玉津島に祭られる稚日女尊は伊都郡の丹生都比賣命にふつひめのみことと団体とする説があり（紀伊続風土記）、また中世両社に神幸のあったことも知れるが（日前宮文書）、この神桂袴姿と唐服姿両様に描かれる。これもまた関わりがあるのかもしれない。

このように住吉玉津島二神をもって尊崇を受けてきた和歌神が、三の基数によ

って表現されるようになるのが何時頃なのか定かではない。ただ天文四年(一五三五)の『後奈良院宸記』には和歌三神という呼称こそ見えないものの、院により住吉神、天満天神、玉津島神の名号が揮毫された記録が遺されている。

神道においても仏教においても三を基数とする論理が古くから盛んに行われていた。その影響は歌学にも表れ、その思想を言挙げするのにはしばしば三の基数を用いている。従って古今伝授もまた、「三木三鳥」のごとく秘伝が三の基数によって表現された。この伝授の儀式に和歌神の御影を掛けることが行われたため、次第に和歌神を三柱に整えることが生じたのであろう。

従って、近世に和歌三神を住吉神、玉津島神、人麿とするのはさほど根拠のあることではない。人麿影供の盛行や、古今伝授成立に大きな役割を果たした藤原俊成が京に玉津島神を勧請し、一方で住吉神を信奉したことが、その後の堂上の和歌神信仰に影響を与えた結果であろう。『類聚名物考』に見るように地下では人麿・赤人・天満宮を祭った例もあった。

三神の選択には『悦目抄』に見る人麿・赤人または住吉神・玉津島神という二神にいま一柱を加えるという方法が標準となったと思われる。変わったものとして玉津島神に小野小町や伊勢などの女流歌人を配する女和歌三神も生れている。だから中尊左右の選択と位置もまた多様であった。京都芸大の土佐派絵画資料には鹿島神を含む和歌三神名号があるが、加える神は歌神に限らず、各自の尊崇する神である場合もあったようである。

吉田流では『諸社根元記』に示すとおり神と人を区別する。和歌三神を表筒男命・中筒男命・底筒男命の住吉三神とし、人麿・赤人・衣通姫は三聖として歌神を整理するのである。この時期既に和歌神に混乱の生じていた状況が推察される。実際人麿は影供により早くから尊崇を受けたことが知られるものの、正一位大明神の神号神階を得たのは千年忌にあたる享保八年(一七二三)のことで、神道家の立場からしても等しく神とするに抵抗があったに違いない。ちなみに伝説的なものを除けば、洛中に人丸社といえるものは冷泉為村が明和六年(一七六九)に興すま

でなかったのである。

だから古今伝授に掲げられる三神などはそれぞれの流儀によって多様であり、伊勢両宮・住吉神・玉津島神や天照大神・住吉神・人麿という例さえあったという(西下経「古今伝授」)。松永貞徳の『戴恩記』には「当流の秘伝には人丸貫之定家卿を和歌の三尊とあがめ奉る」とあるが、近世の歌道家の中にはそれぞれ独自の流儀をもって、微視的になりがちな歌学の継承に差異を見出そうとしたものもあっただろう。

中世の歌論書『愚秘抄』には「人丸供の規式は。釋奠の影供のやうにたがはぬことなり」とある。人麿影供が釈奠を意識して行われたことは「古今和歌集真名序」の「先師」の語から見ても当然の展開といえる。この語については斯道の開祖たる「先聖」の語を用いなかった点でも賢明な選択であった。字句に拘泥するつもりはないが、人麿は「ひじり」として、神または開祖と区別されていた。その意味は「先師」に示されるとおり斯道を隆盛に導いた先達とすべきである。『正徹物語』上巻に「和歌の絶んとする時かならず人間に再来して此道を続給ふべき也。神とあらはれし事もたびたび也。」という語に中世における和歌神としての人麿の微妙な位置が窺えるのである。

むしろ人麿への信仰は地下に盛んだったのかもしれない。これとて、神道家からすれば俗信の類に他ならなかったであろう。洛中に遺る人丸塚の伝説も、伝授とは無縁な人々の様々な信仰の所産であったはずである。

和歌神信仰の隆盛は歌道家によるところが大きい。中世においては、古今伝授を初めとする歌道家の理論が主導となり、和歌神を祭り影供を行うことが盛んであった。近世においては、御所伝授と地下伝授が成立する頃より和歌三神の規範が定着したようである。その後の和歌神信仰は伝授支脈の形成するバリエーションもまた盛んとなり、広く巷間に浸透していった。地下における和歌愛好も古くから盛んであったが、彼等の和歌神信仰を示す資料の少ないことが惜しまれる。